



Data	2025-76
監督:	ウィルター・サレス
原作:	マルセロ・ルーベンス・パイヴァ『Ainda estou aqui』
出演:	フェルナンダ・トーレス／セルトン・メロ／フェルナンダ・モンテネグロ／ヴァレンチナ・ヘルツァジ／マリア・マノエラ／ルイザ・コソフスキ／マルジョリエ・エスチアーノ／パルバラ・ルイス／ガブリエラ・カルネイロ・ダ・クーニャ

みどころ

1970 年、日本中が大阪万博に湧いていたが、学生運動に熱中していた私は、チリ初の「アジェンデ社会主義政権」の誕生に感激！ところが、同じ南米の国・ブラジルの 1970 年は？

朝鮮戦争（1950～53 年）後の韓国の軍事独裁政権による圧政は多数の韓国映画で描かれているが、息子の書いた原作の主人公であり、ウィルター・サレス監督も個人的な交際があった、元国会議員ルーベンス・パイヴァの妻であり、5 人の子供たちの母親たるエウニセ・パイヴァを見るのは本作が初！夫の意思を継ぎ、ブラジルのために行動する彼女の強い意思と行動に感動するものの、政治的背景の描写がほとんどなく、あまりにも“自叙伝”の感が強すぎる脚本・演出はいささか残念！

■1970 年。知らなかったナア軍事政権下のブラジル！■

今年 2025 年は、1970 年から 55 年ぶりに大阪で 2 度目の国際万国博が開催されているが、私の大学時代の大きな節目にもなった 1970 年は、南米のブラジルにとっても大きな歴史上の節目の年だったらしい。寡聞にして、私は 1970 年当時のブラジルの軍事政権のことは知らなかったが、ブラジルと同じ南米の国チリについては、1970 年に初めて民主的な選挙で社会主義政権のアジェンデ大統領が誕生したニュースに驚くとともに、狂気乱舞したことをよく覚えている。

大学入学直後から学生運動に熱中し、ベトナム戦争反対、佐藤訪米阻止、安保条約改定阻止等々のスローガンを叫び、大学内外で各セクトと戦いながら、連日連夜ビラ書きとアジ演説をしていた私にとって、美濃部革新都政、黒田革新大阪府政に続く（？）、チリの社会主義政権誕生は大きな時代変革の流れを象徴する素晴らしい出来事だった。ちなみに、

チリにおけるアジェンデ政権の崩壊とその後のチリの政治情勢は、『チリの闘い 第1部ブルジョワジーの叛乱、第2部クーデター、第3部民衆の力』(1部1975年、2部1976-1977、3部1978-1979年) (『シネマ39』54頁) を見ればよくわかるが、チリにおけるアジェンデ政権誕生に私たちが狂気乱舞していた1970年、同じ南米の国ブラジルでは・・・？

■舞台は首都・リオデジャネイロ！原作は？監督は？■

本作の冒頭は、1960年に新首都ブラジリアに移転するまでは、ブラジルの首都だったリオデジャネイロの海岸で、元国会議員ルーベンス・パイヴァ（セルトン・メロ）がその妻エウニセ（フェルナンダ・トーレス）や、5人の子供たちとともに楽しく遊ぶ風景だ。ブラジルのリオデジャネイロと聞くと、私はすぐにアラン・ドロンと人気を二分していたジャン＝ポール・ベルモンド主演の映画『リオの男』（64年）を思い出す。また、中森明菜のヒット曲『ミ・アモーレ』（85年）の歌詞を持ち出すまでもなく、「リオのカーニバル」も日本人なら誰でも知っているから、ブラジルは平和で楽しい“お祭りの国”！？一瞬そう思ってしまうが、実は1970年のブラジルは、軍事政権下にあったそうだ。1970年、元国会議員のルーベンスとその妻エウニセは5人の子供たちとともにリオで穏やかに暮らしていたが、「スイス大使誘拐事件」を機に空気は一変。軍の抑圧が市民に押し寄せてくる中、ルーベンスは連行されることに。こりゃ一体どうなっているの？

私は韓国の軍事政権の歴史やその問題点についてはよく知っているが、ブラジルの1970年代の軍事政権下の問題点は全く知らなかった。したがって、本作を見ればその点も詳しく勉強できるだろうと期待していたが、本作はルーベンスの妻であり5人の子供たちの母親であるエウニセに焦点を当てた映画とされているため、残念ながらその点は期待に沿うものではなかった。

本作を1970年代ブラジルの軍事政権の問題点を暴く映画とせず、エウニセの生き様に焦点を当てる映画にしたのは、本作が第1にマルセロ・ルーベンス・パイヴァの小説『Ainda estou aqui』を原作としているため、第2にマルセロ・ルーベンス・パイヴァとエウニセと個人的な交際があったウィルター・サレス監督がそれを中心に脚本を書き、演出をしているためだ。なるほど、なるほど。

■妻も次女も連行！過酷な取り調べを！■

韓国では、軍事独裁政権の問題点を暴く映画が毎年のように制作され公開されており、今年の8/22からは『大統領暗殺裁判』が公開される。日本でも、かつては8/15の終戦記念日に合わせて戦争映画大作が作られていたが、今年のそれが東宝映画『雪風 YUKIKAZE』と松竹映画の『木の上の軍隊』だ。ちなみに山本薩夫監督の『戦争と人間』3部作（70年、71年、73年）(『シネマ5』173頁) は、戦争をめぐる伍代財閥と戦争との関連性をメインとしつつ、他方で、治安維持法を巡る問題点が山本圭扮する標耕平や貧しい画家たちを中心に描かれていた。さらに『小林多喜二』（74年）では、特高警察による多喜二の拷問シーンが詳しく描かれていた。

しかして、本作では連行されたルーベンスの尋問風景は一切登場しないが、それに代わって (?) エウニセと次女エリアナ (ルイザ・コソフスキ) の連行とエウニセの尋問風景が詳しく描かれる。そこではエウニセに対する直接的な拷問は見られないが、移動中に聞こえてくる叫び悲鳴を聞いていると・・・？さらに、連行後一向に消息がつかめないルーベンスが死亡したかもしれないとの情報が伝わる中、きっと受けているであろうルーベンスの拷問風景は・・・？

もっとも、連行されたエウニセの 10 日以上に及ぶ尋問風景を見ても、尋問側の目的や狙いは関係者の洗い出し以上には見えてこないし、仕方なくエウニセが提示された写真リストの中から知り合いの写真を指差した後の展開も、本作は全く描かれない。本作が強調するのはもっぱら、軍事政権の過酷な取り調べの前に、恐怖に震えながらそれに何とか負けないで頑張ろうとするエウニセの決意だ。次女のエリアナが母親と一緒に連行されたのは、第 1 に長女のヴェロカ (ヴァレンチナ・ヘルツァジ) がイギリスに留学中で留守だったこと、第 2 にエウニセの供述の真偽を確認するためだが、エリアナも「私は何も知らない」と言い続けたから、結果的に 2 人とも釈放されることに。父親に続いて母親もいなくなってしまったパイヴァ家はエウニセとエリアナが戻ってきたことに大喜びだが、さこれからのエウニセの行動方針は？これにて反軍事政権行動の活動は中止！？いやいや、エウニセはその逆だからすごい！

■□■ 2 人の主人公の誕生から本作公開までの年表に注目！ ■□■

ブラジルは 1945 年に独裁が終了し民主化の時代に入ったが、1964 年の軍部によるクーデターによって民選政権が崩壊！70 年に本作が描くスイス大使の誘拐事件が発生し、翌 71 年 1/20 にはルーベンスが連行され、1/21 はエウニセと娘のエリアナも拘束された。民主化の第一歩は 1978 年以降。その詳細は次の年表のとおりだ。

CHRONOLOGY 年表	
1939年	11月7日、エウニセ、サンパウロ・ソラス無罪に釈放。イタリア軍務院の要請に言う。12月26日、ルーベンス、サンパウロ・サントスに連行される。
1945年	ヴァルガス下野。独裁が終結し、ブラジルが民主化の時代へ。
1952年	エウニセとルーベンス、結婚。
1953-1954年	エウニセ、第一子ヴェロカ (1953)、第二子エリアナ (1954)、第三子ナル (1957)、第四子マルセロ (1958)、第五子パビウ (1960) を出産。
1962年	ルーベンス、ブラジル労働党 (PBT) からサンパウロ州選出の連邦下院議員に当選。
1964年	軍部がクーデターを遂行し、民選政権が崩壊。軍政令第1号 (AI-1) を発令して連合の制度を廃止し、政治犯の公開捜査を合法化。ルーベンスとパイヴァの議員資格も剥奪される。カスプリ・ソウザンコ院室が本拠地に転移。
1965年	パイヴァ一家はリオデジャネイロに転居。ルーベンスは土木技師として復興しつつ、亡命した主人やその家族の支援を続ける。
1967年	政府が新憲法を公布。大統領の権限をさらに強化。
1968年	軍政令第5号 (AI-5) が発令。言論・報道の自由が廃止され、有状なしの逮捕・拘束・尋問が合法化される。
1969年	アメリカ大使チャーles・エルブリックが主筆グリウに誘拐される。殺害犯15名と交換され解放。
1970年	12月1日、スイス大使ジョヴァンニ・エンリコ・ブツァハート誘拐事件発生。軍治部釈放と引き換えに解放。
1971年	12月10日、ルーベンスとパイヴァ、軍により浴室から連行され拘束される。
	翌21日、エウニセと娘エリアナも軍に拘束。エリアナは11日で釈放されるが、エウニセは13日間拘束され、酷しい拷問を受ける。
1972年	エウニセはマンダージー大学法律部に再入学。6人の子を育てながら法律家への道を歩み始める。
1974年	エルネスト・ガイセル軍部が本拠地に移住。国内的な人権擁護や国内経済の停滞を受け、軍事政権の悪化が図られる。

1975年	ジャーナリスト、ウラジミール・エルソフの疑問死が国家的抗議運動の契機に。
1976年	AI-68価値。政治犯への検閲が憲法的に非難される中、民主化への一歩となる。
1979年	憲法裁判所設立され、政治犯の釈放が進む一方、治安官の暴行被害にも被害が適用される。
1983年	エウニセ、弁護士として住民民族パタジエの権利擁護を主張する意見記事を発表。
1986年	記者に殺害され、軍事政権が終結。大統領に選出されたラウ・グレイド・ネーグレスの急進を受け、親大統領ジョセ・サルネイが脱任。
1988年	エウニセ、政府の開発計画に対する調査報告で、住民民族の権利擁護を推進。
1987年	エウニセ、人類学環境研究所(IAMPA)を共同設立し、住民民族の権利擁護を制度的に推進。
1991年	ルーベンス失踪事件が米州人権委員会(OAIC)にて受理、国際的な注目を集める。
1993年	ブラジル連邦特別委員会が、ルーベンスを「政治的失踪者」として正式認定。
1995年	「失踪者追跡法」が制定。大統領署名式において、エウニセは唯一の遺族代表として出席を許される。
1996年	国連よりルーベンスの死に賠償金が正式に交付。事件から25年経ちに死が公的に認められる。
2004年	ブラジル政府(ルーフ政権)、初めてルーベンス遺族への公式謝罪を表明。
2012年	国家真実委員会(CMIV)の調査により、ルーベンスが軍に拘束されていた記録が明らかになる。
2014年	CMIVによる最終報告書で、ルーベンスの死は「国軍による違法拘束・拷問・殺害」と再認定される。
	ブラジル連邦検察庁(MPFI)、ルーベンス失踪事件で元軍人5名を殺人・死体遺棄などの容疑で告発。
2015年	マルセロ・ルーベンス・パイヴァの回想録『Ainda Estou Aqui』を出版、両親の記憶を語り継ぐ。
2018年	12月13日、アルツハイマー型認知症による長い闘病の末、エウニセ、サンパウロで逝去。享年88歳。
2024年	映画『アイム・スチル・ヒア』ブラジルで公開される。

■妻として母親として、更に弁護士としても超一流！しかし？■

世の中にはすごい女性がいるもの。私は観ていないが、今年公開された『ゴッドマザー〜コシノアヤコの生涯〜』(25年)や、NHKの朝ドラで描かれたコシノ3姉妹の母親たるコシノアヤコはまさにそれだ。しかし、本作のエウニセが育てた子供は女4人、男1人だから、コシノアヤコよりもすごい。その上、本作の原作となったマルセロ・ルーベンス・パイヴァの『Ainda estou aqui』は彼女の実の息子の著作だし、エウニセ自身も夫が連行された後子育てに精を出しながら、新たに弁護士資格を取り、夫の活動を引き継いだからすごい。エウニセの活動が半端ないことは、本作を最後まで観れば実によくわかる。

もっとも、私は第81回ヴェネツィア国際映画祭で最優秀脚本賞等を受賞した本作にケチをつけるつもりはないが、本作がマルセロ・ルーベンス・パイヴァの原作に沿ってエウニセの自叙伝に徹したことにはあまり賛成できない。しかも、本作は1970年の事件発生から26年後の1996年だけでなく、老齢期のエウニセを描いているため、老齢期のエウニセの他、成人期の長女、成人期の次女、成人期の三女、成人期の長男、成人期の四女まですべて登場させて家族写真にこだわり続けているが、その是非は？

夫の連行後その活動を引き継ぐために、エウニセが弁護士資格を取ったのは立派。さらに本作ラストではルーベンスの死亡証明書を獲得したから立派なものだ。しかし、本作ではそれだけではなく、ブラジル軍事政権の問題点やその背景などを描いてほしかったと思うが、それは私だけ？

2025(令和7)年8月20日記